

青少年地域活動ふるさとを見なおそう 第2集『長門昔ばなし』より

あずき おんな

## 小豆とぎの女

大門峠だいもんに一番近い小茂こもが谷やの部落は谷あいやまにあり、南の窪から流れだす浦沢川うらさわと北側の山吹やまぶきの沢から流れでる清流にそって部落ができました。

最初の頃は家の数もすくなく、人どおりもわずかでしたし、閑散としていて静かすぎるほどでした。部落のまんなを東西によこぎる浦沢川には木の橋が掛けられ「すぐじの橋」と呼ばれ大門峠の方に旅をする人の便宜もはかられました。

みじかい山国さんごくの夏も終わり四方の山々はすでに紅葉がはじまり、肌寒い秋の夕暮のことです。ひとりの村人がすぐじの橋を渡ろうとすると「シクシク」と女のすすり泣くような声が橋の下から聞こえてきます。「おや。」  
と違って足を止め、きき耳をたてると女のすすり泣く声にまじって「シヨキ シヨキ シヨキ シヨキ……」  
と小豆をとぐような音が聞こえてきました。村人は急にこわくなり家にとび帰りました。

こんな話が隣の人から隣の人に伝わると「俺も、おらも聞いた。」という人が数人現れました。なかにいた威勢のよい若者数人がその正体を見とどけることに相談がまとまり、夕暮を待って、一人の若者が橋のそばの物かげに身をひそめていると、話のとおり橋の下から、女の人のむせぶように、すすり泣く声とともに「シヨキシヨキシヨキシヨキシ」和小豆をざるに入れて川の中でといでいるような気味の悪い音が聞こえてきました。「それっ、出た。」身を物かげにひそめていた若者のあいずで、待っていたほかの若者数人が、かけつけて橋の下や付近をさがしまわりましたが、なんにも見あたりませんでした。

こんなさわぎがあったせいか、小豆をとぐ音も、女のすすり泣く声も聞こえませんでした。しばらくすると、また聞いたという人がはじめました。

今度は人が通るとすすり泣く声も小豆をとぐ音もぴたっと止み、人が通り過ぎてしまうと、むせび泣く声と小豆をとぐ音がはじまり、驚いて振りかえると音はぴたっと止み、物音ひとつしませんが。

村の人たち数人がこんな体験を重ねると、いつのまにか「小豆とぎの女」と呼ぶようになり行儀の悪い子供には、「いうこときかねと、すぐじの橋の小豆とぎの女にくれてしまうぞ。」と行って子供をしかるときのことばになっていました。